

舌の楽しみ 追求するまち

山下町
中華街



早朝の中華街。忙しい1日の始まりだ



もっとも賑わいをみせる中華街の夜



中華街大通り裏手にある関帝廟

横浜・中華街の中心は、何といっても二五〇軒をこえる中華料理店。ここに来れば、上海、広東、四川、北京などあらゆる地域の料理が楽しめ、その味も本場中国や香港にひけをとらないとあって、訪れる客は、平日で三〜六万人、一年では一八〇〇万人をこえる。

中華料理店の朝は意外に遅い。本格的な目覚めは朝の九時頃。テンポの早い中国語のあいさつが交わされ、店の掃除や仕込みが始まる。

料理人の中には、上海、広東、香港などから、腕を見こまれて招かれた人も多い。彼らの多くは期間を定め、家族を故郷に残して単身で来日、中華街の中や市内のアパート、マンションから通勤している。

中華街では十一時に開店する店が多い。その頃にはバスで訪れたツアー客などが往來を行き来している。中国物産を売る店で土産物を買ったり、肉まんや焼き豚などを買い込む客も多い。

中華料理店の経営者たちを中心にした「横浜中華街発展会協同組合」によると、グルメブームに加えて、平成元年に横浜ベイブリッジが開通したことが追い風になり、中華街を訪れる観光客は二十年で二倍になったという。

昼食の賑わいも一時を過ぎる頃にはおさまり、中華街はふたたび静かな街を取り戻す。

厨房で忙しく働いていた料理人たちにとっても、ゆったりとしたひとときを過ごす。

せる時間である。

中華街の中にあるビデオショップに立ち寄る人も多い。香港映画などのビデオレンタル店は、この街に住む人たちの手軽な娯楽として欠かせなくなっているようだ。店内には、中国語のアクション映画などがずらりと並んでいる。

発展会協同組合によると、最近、中華街で働く料理人に「出稼ぎ」ではなく、日本に永住を希望する人が増えているという。日本で腕を磨き、資金を蓄えて、独立することを目標にしているのだそうだ。

夕方五時を過ぎると、一日でもっとも忙しい時間が始まる。人気の高い店の前には、早くも行列ができている。ここ数年、中華街は建設ブームで、木造の店、小さなビルが次々と七、八階建てのビルに替わっている。収容能力を増やし、豪華なインテリアなどで集客を図るためであるが、昔ながらのたたずまいの店にも長い行列ができていく。

店内の日本語の楽しそうな会話と、厨房の中国語のやりとりが静かになるのは、ラストオーダーの八時半過ぎ。ほとんどの店は九時半には閉店する。それでも十時頃までは、土産物屋を散策する観光客の姿が見られる。

店内では翌日の料理の仕込みなどが続けられ、十一時、料理人や店員が家路につくと、中華街も短い眠りの時間を迎える。